

# 台湾におけるオランダの植民と布教

溝 口 靖 夫

## 目 次

- 一、緒 言
- 二、オランダの東インド進出とキリスト教
- 三、オランダの台湾植民の端緒
- 四、オランダの台湾におけるキリスト教伝道の経過
- 五、台湾におけるスペインの植民との角逐
- 六、オランダの台湾植民の終焉と宣教師
- 七、むすび

## 一、緒 言

近世ヨーロッパ諸国およびアメリカによる世界の植民的活動とキリスト教の布教との関係は密接なものであるが、そこには種々の型が存在したものと考えられる。大別すれば、スペイン、ポルトガルおよびフランスのカトリック的な型と、イギリス、オランダ、ドイツ、アメリカ等のプロテスタント的な型となるが、前者は政教一致的であり後者は政教分離を建前とする。ただし、イギリスの場合には国教会と非国教派との別があり、特殊の立場にある。この間にあって、オランダはプロテスタント国家であるので、一応政教分離政策をとっており、その現われがわが国と

の歴史的關係に見られるのである。しかしオランダは常に必ずしも政教分離的ではなく、政府が植民地における宗教行政にも関与し、イギリスの場合におけるが如き、強力なる民間の布教活動が発展しなかつたところに植民と布教との關係におけるオランダの特性が見られるのではなからうか。すなわち、徹底した政教一致的な布教政策でもなく、徹底した民間の自由な活動でもなく、政府が布教に干渉しながら、時と場合に應じて、これに対する支持の度合に著しい相違があるという、いわば政府の布教に対する徹底した便宜主義と見られるもの、これがオランダの植民と布教との關係を理解する鍵となるものと思う。そしてその根本にはオランダの対外的な射利的精神が流れていたであつて、日本におけるオランダ人は、あたかもキリスト教を知らざるかの如き純然たる商魂の持主として反映しているのであるが、同じこのオランダ人が、日本を去ること程遠からざる台湾においては、最初から強力なる布教政策に終始しているということは、注目すべきことである。しかもなお、オランダ人の布教者達の内部的な印象によれば、台湾の布教に関して政府は必ずしも熱意を有するものでなくかえつて政治的な制約さえも感じられたものようである。これらの特質を以下やや具体的に歴史的現実を通して考察したいと思う。

## 二、オランダの東インド進出とキリスト教

オランダ人による東洋への航海探検は一五九四年から九七年にかけて行われたが、これに貢献したのは、かのヤン・ハイヘン・ファン・リンズホーテン (Jan Huygen van Linschoten) の『東洋におけるポルトガル人航海記』<sup>(1)</sup>であった。リンズホーテンはハーレムに生れ、少年時代にポルトガルに赴いて或る司祭の下で働き、この司祭がインドのゴアの大神教になったとき秘書として伴われてインドに渡り、一五九二年に郷里に帰り、間もなく著わしたのがこの書である。この書はポルトガル人が公開するを好まなかつた東洋航路についての知識をオランダ人に与え、同国人に東洋進出の志気を鼓吹したのである。

もう一人の貢献者はペトルス・プランキウス (Petrus Plancius) といい、牧師で地理学者であったが、リンスホーテンの報告書をもって、海上の広さを測定する資料に利用し、オランダ人に航海の知識を与え、自ら航海学校を設立して海員の養成につとめ、更に、出版業者コルネリス・クラエス (Cornelis Claesz) はプランキウスの援助を得てアジアの海図・地図を出版した。<sup>(2)</sup>

こうして一五九六年東インド航海に着いた最初のオランダ船は「神様に捧げられた船」と呼称され、六月二三日バタムに入港している。この第一回の航海に刺戟されて一五九八年には第二回の艦隊が東インドへ出航し、このときプランキウスの計により二人のいわゆる「病者慰問使」が乗組んだ。これが東インド方面の最初のプロテスタント伝道者であった。しかし彼らの任務は住民を相手ではなく、航海中の同国人に対する精神的な慰問者であったにすぎない。また彼らは按手札を受けた正式の牧師でなかったので聖礼典を司る権能がなかったが、その後実際上の必要から、洗礼を授ける資格が与えられ、異教徒にも授洗することを許された。これが東インドにおけるプロテスタント教の布教の萌芽であった。最初は船の持主がこのような教師を送るのを取決めていたが、一六〇一年には教会側から注文が出て、東インドに送られる伝道者は牧師としての資格あるものでなければならぬと主張された。そしてその任命は教会会議 (Classis) の司るべき事柄であるとされた。しかし会社の理事会即ち「十七人会」では、かくの如き牧師が先ず政府に申請され、しかる後政府によって適当とされた後、教会会議に付議さるべきものであると決定したのである。

一六〇二年にはオランダの連合東インド会社に正式の特許状が賦与されたが、これには、宗教上の又は教会のことは何も含まれていなかった。しかし事実上は今述べたように、船隊付説教者がいたのであり、又、最初のオランダ総督はこれら説教者並びに教師の監督をするよう命ぜられていたのである。この東インド会社専属の説教者並びに教師というのは、ただ会社の従業員に対する精神的福祉のために尽すだけでなく、異教徒をも改宗せしめ、その子女を教

育する義務をもっていた。彼等の信念によれば、「神の栄光と会社の祝福のため」であつたからである。とにかく総督は、宗教上の事柄についても監督の義務を有し、異教徒に福音宣伝の指導をなすべき責任を担っていたわけである。<sup>(3)</sup>

### 三、オランダの台湾植民の端緒

オランダ人が台湾に来るよりも以前に、ポルトガル人とスペイン人が既に現われたが、その年代及び事蹟は詳でない。イギリス人もオランダ人に先んじて来島したとの説もあるが確かでない。

オランダ人のはじめて台湾諸島に到来したのは一六〇三年又は一六〇四年のこととされている。これより先き、一六世紀の末にオランダ本国では東洋への航海を目指したいくつかの会社が生れていたが、一六〇〇年にはこれらが連合して連合東印度会社となり、前述の如く一六〇二年三月二〇日正式の認可を受けて翌一六〇三年にはバンタムに同会社の居留地が設けられ、ここを根拠地として、これ以後東印度以東の各地に活躍することとなった。また一六〇〇年には先きに一五九八年ロッテルダム会社から派遣された五隻の船の中のリーフデ号が四月一九日（慶長五年三月一日）豊後に到来し、その船に有名な日本に來た最初のイギリス人ウィリアム・アダムスが航海長として乗組んでいたのである。ついで一六〇九年（慶長一四年七月二五日）にはオランダ人は家康から通商許可の朱印状を得、同年九月二〇日（慶長一四年八月二二日）平戸での船員會議の結果、オランダは平戸に商館を設けることになり、その後二十三年間平戸に、その後長崎の出島において、安政二年まで二百余年の間、日蘭貿易を続けたのである。

オランダ連合東印度会社はバンタムに会社を進出せしめて以來、夙に中国との貿易を欲していた。これにより、日本とバタビヤとの中間の足場を得、また日本に輸入すべき貨物を中国から得ることができると考えたからである。そこで中国との貿易開始交渉のため、一六〇四年オランダ艦隊司令官ファン・ワルワイク (Wybrand van Warwyk)

を中国に派遣した。彼は同年六月二七日マラッカ半島の東岸のパタニを出帆したが、途中暴風に妨げられて八月七日澎湖島に寄港したのである。ここから中国に人を派して交渉せしめたが成功せず、一月一五日ここを引揚げて帰った。一六〇七年にも司令官マテリーフ (Cornelis Matelief) が中国に遣わされたが、中国側はこれに応じなかった。

かくて数次にわたるオランダの中国貿易開始のための努力も空しかったので、オランダ総督は、一六二二年コルネリス・ライエルセン (Cornelis Reyerssoon) を司令官に任じて、ポルトガルの中国根拠地マカオを武力で攻撃し、ポルトガルを中国から駆逐するとともに、中国をしてオランダに開港せしめようと試みた。ライエルセンは同年四月一〇日軍船八隻を率いてバタビヤを発し、六月二日マカオ港外に着き、これに更に四隻を加えて、二四日マカオを攻撃したが、ポルトガル人はよく防戦したので、オランダ人の中国に対する望は果されず、その後もついにその機会は来なかった。マカオの攻撃に挫折した彼らの或る船は日本に向ったが、他のものは澎湖島に向い、七月一〇日同島の媽宮に投錨した。しかして彼らは同月二七日には更に台湾本島の沿岸を探険しており、これがオランダの台湾方面への進出の発端となった。

その後直ちに彼等は澎湖島の西南端に築城を開始し、一六二四年初めには殆んど完成した。この間中国側はこれに對して強硬な反対をなし、オランダ人が一日も早く台湾本島へ移るよう交渉して来た。ライエルセンもまた一六二三年一〇月にはタイオワン (Tainouan—今日の安平) に仮の城の建設に着手したのである。

一六二三年末より澎湖島に関する中国官憲の態度はいよいよ強硬となり、翌年二月には四五十艘の中国の艦隊が澎湖島の北端に現われるようになった。当時オランダの同島における兵力はこれに比して極めて劣勢であったので、同年四月末ライエルセンはタイオワンの城を破壊して、同地の兵力を澎湖島に引揚げさせた。

それより間もなく、ライエルセンは願により任を解かれて、その後バタビアの參事官、医師ドクトル・マルチヌス・ソック (Marten Sonck) が新長官として澎湖島に遣わされた。彼は同年八月に澎湖島に着いたが、着任して見

ると、同島の中国との関係は想像以上に緊迫していたので、澎湖島を捨てて、タイオワンに移ることとし、八月末漸く完成したばかりのこの地の城を破壊し、九月初め一同台湾に移ったのである。ここで彼等はタイオワンの破壊された城跡に再び城を築くこととし、これをオランジ公(一五八一年オランダ北方七州が同盟を結んでイスパニアから独立した当時のオランダ盟主)の名に因み、オランジ城と命名した。しかしてその翌年の一六二五年初めには、その対岸である本島のサッカムの地に町を建設し、これをプロビンシア(Provincia)と称した。これはオランダの北方七州(プロビンシェン)に因んで名付けられたのである。

一六二五年九月にはソンクに代ってデ・ウィット(Gerard Frederikszoon de With)が第二代の長官となった。更に一六二七年六月にはヌイツ(Pieter Nuyts)が第三代長官に着任した。その後間もなく、アムステルダム本社からオランジ城及びプロビンシアを共にゼーランシア(Zeelandia)と改称するよう命令があり、爾来そう呼ぶこととなった。その名は第一代長官ソンクが台湾に来たとき乗ってきたゼーランシア号に因んだものではないかと考えられている。このゼーランシアの本城の完成したのは一六三二年末であり、一六三四年には外城全部が竣工した。かくて、一六六二年鄭成功に攻略されるまで、この城は、バタビアと日本とを結ぶオランダの東亜の拠点として貿易上、軍事上、最も重要な役割を果たしたのである。

#### 四、オランダの台湾におけるキリスト教伝道の経過

台湾にオランダ人の布教が始められたのは一六二四年タイオワンの初代長官ソンクの着任した年であり、テオドリ(Michel Theodori)とラウレンゾン(Dirk Lauwrenzoon)の二人の伝道師が送られた。しかしテオドリは間もなくバタビアへ呼びかえされ、ラウレンゾンがその後をうけて一六二七年五月までこの地で伝道した。更にデ・ヨング(Cornelis Jacobszoon de Jong)なるものが一六二五年来島して伝道したが同年一二月バタビアに帰り、また

一六二六年一月には伝道師ブライニング (Herman Bruyning) がバタビアからデ・ウィット長官に伴われて来島している。しかしこれらはいずれも正式の牧師ではなく、その布教の成果も未だいふべきものはなかったが、一六二七年五月、最初の牧師カンディウス (Georgius Candidius) が派遣されて以来、本島の布教は本格的になったのである。彼は五月四日に着任後直ちに伝道を始め、特に熱心に土語を勉強した。そして翌年末にはクリスマスの二週間前一二八名ものが、主の祈りとキリスト教の信仰の主要点を述べることができるようになったと報じている。<sup>(9)</sup>

カンディウスより二年おかれて、ユニウス (Robertus Junius) が加った。彼も亦熱心に土語の習得につとめた。はじめ二年間はオランダ語で伝道していたが、住民はそれを理解できなかったので 非常な苦心をして土地の言葉を覚え、長足の進歩を示し、三年目からは住民自身の言葉で「キリストの福音の驚くべき奥義」が語られ爾來十二年間すなわち、一六三一年から一六四三年まで台湾伝道につくした。

カンディウスは一六三一年にバタビアに召還されたが、彼の台湾への熱意は已み難く、二年後再び台湾へ帰って来た。そして、更に二年後の一六三五年には七〇〇名の大人の信徒を教えるようになった。この伝道地は当時このようにかなり有望なものと思われたので、一六三六年にはオランダ政府に、更に少くとも十五名の牧師を派遣されるように教勢報告並びに要請がなされている。<sup>(10)</sup>

一六三七年にはカンディウスが来島以来十年目にオランダに帰ったので、ユニウスが独りで働くことになった。当時の伝道地域は、ゼーランシア城周辺の村々であり、その代表的な村は新港社 (Sinkang—サッカム公台南) の北方七哩) を中心に、諸羅山 (Trosen) 、哆囉囹 (Dorko) 、芝舞蘭 (Tevorang) 、藤豆 (Mattau) 、蕭龍 (Soulang) 目加溜灣 (Bakloan) 、大目降 (Tavakan) 、タカライヤン (Takaraiang) 、耶橋 (Longkian) 、放寮 (Pangsoia) 、大木連 (Tapouliang) 、フアボラン (Favoriang) 等の各社であった。ユニウスはこれらの村々に活潑な伝道を推進していたが、可成り健康を害したので故国に帰りたいと申し出て、ハビウス (Joannes Bavus) と交替することにな

った。しかしその努力によって漸次伝道の成果を見るに至った。彼の一六四〇年一月二三日付の報告によれば、

「二三日前われわれはシンカンとタバカン、バクロアン、マトウ及びスウランの村々を訪れ、かねて伝道中の多くの住民に説教をし、洗礼を授けた。われわれの見るところでは、彼等は非常に熱心であり、朝な夕な規則正しく校長たちの家に集まり、教を受け、いまでは立派に諸種の祈禱を捧げることができるようになった。洗礼を受けたものが一番多かったのはスウランで、すなわち十二名であった。……私は更にスウランやマトウ、バクロアン、タバカン、テボラン等で洗礼を受けるにふさわしいすべてのものたちが、一日も早くこれを授けられるように希っている。スウランではいまままでに一〇七〇人のものが、又他の村々でも相当数のものが洗礼を受けた。」

すなわちユニウスは二十三の村で住民にキリスト教を伝え、六つの村で五千四百人以上のものに洗礼を施したのである。

一六四〇年バビウスが来島し、ユニウスは十年間の働きを終えて帰国を許された。しかし彼は一年後に二人の宣教師を伴って再び台湾に渡来し、更に一六四三年まで三年間活動した。そして彼の在島中約五九〇〇人の住民が彼から洗礼を受けた。

彼は多くの人々から惜しまれながら、一六四三年末台湾を去ってバタビアに向い、その後間もなく故国へ帰り、一六五六年その地で逝去した。

一六二七年から一六六二年までに二十九名の牧師が台湾に派遣されているが、ここでわれわれの注意を惹くのは、彼等の台湾人伝道における諸困難とそれに対する対処の仕方についてである。カンディディウスが一六二八年八月二日新港からバタビア総督クーンに送った書翰にその困難な事情が次のように報告されているのは参考になるものと思う。すなわち次の三点が挙げられている。

第一、一年前（一六二七年）新港<sup>シンカン</sup>社民を伴って日本に赴いた日本人が去る（一六二八年）四月当地に現われて以



来、新港住民に動搖が生じ、われわれに対して敵意をいだくに至った。その理由は、日本人が新港社人とともに港に到来以後、幾日も経っているのに、彼等の進退についての何等の取決めもなされていなかったからである。このことを新港人は甚だ奮慨した。彼等は同胞が永らく故郷を離れていたもので、一日も早くその家に帰るのを待っていた。しかし彼等が港に碇泊中何事かが起らねばよいがと案じていたのである。彼等の中五名はすでに死亡していたので、殊にその心配は強かった。

その後総督は新港人を岸辺に連れて来るよう日本人と了解を遂げたので、彼等は帰郷を許されるものと思つたのであったが、直ちに捕われてオランダ船の中に監禁されてしまった。そこで新港人はすべて子を奪われた牝獅子のような有様になった。そこで一斉に怒りが爆発し、余は威嚇されて、余と召使は彼等の間に取残されたまま身辺に危険をさえ感じて来た。ここにおいて余は長官に事態を急報し、速かに当伝道地に兵士の一隊を送りたいと請願したところ、長官は余の安否を気遣い、危急のときには直ちに城内に遁るべきことを勧めて来たのである。しかし余は結局当地に留ったが、それによって少しも民心の好転は見られなかった。その間、日本人は長官をその延宅に襲い、彼とその息子を捕えたのである。新港人はなおも捕われの身であったが、その中の四人の指導者は夜中ひそかに鎖を切つて海中に飛び込み、岸に泳ぎついて、村に逃げ帰り、オランダ人に就いての悪評を撒き散らした。遂にオランダ人は日本人と妥協した。これによって長官は或る条件の下に、自由の身とされる事が決められた。この条件の中には、捕われ中の新港人の釈放のことがあった。また彼等が日本人からもらつて来てオランダ当局から没収されていた土産物も返却されることがあった。今や自由をえた新港人は、多くの支那人に付き添われながら己が村に帰つて行つた。村人の歓迎振りは非常なものであった。そして日本人が新港人に日本への途中、及び日本滞在中に与えた少なからざる好意に対して心からの讃辞を呈し、また彼等が帰途多くの贈物と金銭とを賜つたことに対して深甚なる謝意を表するのであった。これに反してオランダ人は彼等を虐待し、日本からの土産物さ

えもすっかり掠奪してしまつたものと憤るのでつた。このようにして、新港社の民心は、いまやわれわれから遠ざかること甚だしく、すべてのものがわれらに対して敵意を懐いている。このような彼等の気持がこの四月以来、われわれの布教の障礙になつてゐるのである。

第二に、巫女が布教の障礙になつてゐる。彼等は、民に迷信を信ぜしめ、偶像を祭らしめる。余は住民に聖書の真理を語り、祈禱を教えるので、或るものはすでにキリスト教の信仰に傾いてゐるが、たとえ受洗の志願者があつても、これに洗礼を授けることを差控えている。何故ならば、彼等は未だに偶像に向つて豚や魚や肉や牡蛎や米、酒等を献げ、また彼等は夢見や鳥の飛び方、鳴き方によつて占いをしてゐる。また嬰兒殺しは極めて普通である。故に余は彼等がその偶像を棄てて日常の生活を聖書に基づいて行い得るに至るまで洗礼を延期するのである。

もう一つの迷信は、彼等が日本を訪れて以来懐かれてゐる恐怖に関わるものである。すなわち彼等はキリスト教を信ずることにより、彼等の神々が怒るであろうと恐れるに至つた。それ故彼等はわれわれに対して或る一箇所以外の場所で説教をしないように申し出て来たのである。彼等はまた余の許に来て、風雨を左右し、未来を予言する力があるかと尋ねたが、余はその力をもつていないと答えたところ、彼等は余を軽侮し、巫女にはその力があると得意になるのであつた。

第三には、島民の社会が無政府的であることである。すなわち余が相手として凡ての人民の名において語り得る主権者もなければ酋長もないことである。それ故に今日一人のものに道を伝えても明日はそのものは居所も不明となり、また一月程も旅に出て帰らぬこともある。また他の人々に妨げられて希望通り信仰に入ることのできない場合もある。新港社のみはオランダの保護下にあるが、マトウ社とバクロアン社とは新港社と敵対關係にあり、しかも日本とオランダとの間に紛争があつて後は新港社も動揺してゐる故にもし長官が白人の兵隊を当地に送つて住民を保護されればよし、然らざればマトウ社とバクロアン社とは新港社を攻めて住民を惨殺するであろう。又新港社

のものもオランダ人自身が新港社を襲うであろうと恐れて、多くのものは家財を携えて山中に逃げてしまった。故にいまやわれわれは彼等に向つて、彼らが若しわれわれの風俗慣習を採用してわれわれに従うならば、オランダ人  
はかならず彼等を保護するものであることを示す必要がある。そうすれば彼等はわれわれの命令に服するであら  
う。」

これを見ると、宣教師が治安のために、オランダの守備隊の力を要請していることは明らかであり、ここにも植民  
と布教との政治的並びに軍事的連関性を見ることが出来る。この点、オランダもスペインやポルトガルの場合とあま  
り異なる。なおまた、右に掲げられている第一の理由は、浜田弥兵衛の事件に関するものであり、この事件につい  
てのサイドライトを与えるものとして興味深いものである。

カンディディウスの挙げている三つの困難の他、根本的に重要なものとしては言語の通じないことが考えられた  
が、これについては既述のように、最初から各宣教師が土語の習得に大なる努力を払ったことを忘れてはならない。  
殊に一六四七年から五一年にかけてこの地で伝道したグラビウス (Daniel Gravius) については一言を要する。彼は  
さきにバタビアで有力な伝道者として重んぜられていたが、彼自身召命を感じて台湾に向つたものである。彼は語学  
の才に恵まれており、四年間の伝道後故国に帰つたが、その後新約聖書の台湾語訳を始め、一六六一年にはマタイ福音書  
のオランダ語・シンカン語対訳が完成されたのである。<sup>(15)</sup>

## 五、台湾におけるスペインの植民との角逐

台湾におけるオランダの強敵は他ならぬ日本人であつたが一六二八年の浜田弥兵衛事件と、その後五ヶ年に亘る日  
蘭交渉の結果、一六三三年には日本との問題は一応解決し、残るはただスペインの勢力のみとなつた。

スペインが本島に進攻したのは一六二六年である。スペインはオランダがタイオワンに根拠地を獲得したとの報に

狼狽し急拠これに対抗し得るため台湾に適當の地を探し始めたのである。その結果同年五月東北部海岸のサンチャゴ（三貂角）に着し、更にキールン（基隆）に入り、五月十六日台湾占領の式を挙げた。このときスペイン軍には他の場合においての様に、ここでも宣教師が第一線に従軍している。マルティネス（Martinez）外五名のフランシスコ派の宣教師の活動は目覚ましいものであった。そして、同港の社寮島にサンサルヴァドル（Salsalvador）城を築いたのである。その後一六二九年七月には、カシドール（淡水）を占領し、サンドミンゴ城（Sandomingo）を築き、この二箇所をもって日本及び中国への活動の基地としようとした。これはスペインのフィリッピン以北における唯一の根拠地としてすこぶる重要性をもつものであり、一時はその将来性も甚だ有望に思われた。事実彼等はキールン占拠の翌年相當の兵力を集めてオランダのゼーランジア城攻略を目指したのであったが、それには失敗した。しかるにマニラのスペイン総督のコルクエラ（Corcuera）はゼーランジアにおけるオランダ勢力についての認識を誤り、その後は比較的劣勢なる兵力をもってキールンの守備に当らしめたのである。

しかるに、オランダ側では事態捨て置き難いものとし、着々打倒スペインの準備を進め、一六四一年には遂にその第一歩を踏み出したのである。すなわちゼーランジアの第六代オランダ長官トラウデニウス（Paulus Traudenius, 1641-1643）は、ゼーランジアから一六四一年八月二六日付をもって、キールンのスペイン長官ポルティオ（Gonsalo Portilio）に対して降服勧告状を出したのである。これに対して、スペイン側は断乎応戦の意思を表明したので、直ちにオランダ軍は淡水攻略に向ったが、これは失敗に終った。しかしながらこの経験によりオランダ軍はスペイン軍の状況を打診することができ、次の攻撃に備えたのである。スペイン側もこのことを考え、同島の司令官並びに宣教師らは熱心に対策を練ったのである。そしてドミニコ派のロスアンゲレス（Juan de los Angeles）はあらゆる危険を冒して台湾を出発してマニラに向い、救援隊の派遣を乞うたのである。この申出は相當の反響を与えたが、その実現には取らなかった。マニラ総督コルクエラは台湾の保有にさほどの関心をもたなかった。しかも彼は事態に対する怠慢の

諍りを免れるために、僅かばかりの兵力を派遣することとし、これをロスアンゲレスに伴わしめて小船に託した。船は途中難破したが、全員他の船に乗り替え、辛うじて台湾に到着した。

しかるに、一六四二年八月三日オランダ軍は再び淡水に迫り、同月二一日キールンに到着、少数のスペイン軍による反攻を排除して敵前上陸し、六日間の戦闘の後遂にこれを降した。ここに北台湾のスペイン根拠地は十六年の短命に終わったのである。この時この地の全スペイン兵及び宣教師は捕虜となってタイオワンに連れられ、後バタバピアに移された。しかしオランダ人のスペイン宣教師の待遇は良好なものであったとスペイン側の史料に見えている。そして彼等は結局何等の代償なしにマニラに返えされた。

スペインの北部台湾における布教については相当の成績を挙げたらしいがその数は不明である。ただし、十六年間に來島した宣教師は二十九名であるとせられ、その多くは住民に殺され布教は困難なものであったことが明らかである。オランダ人がスペインの勢力を駆逐して後も、当地の住民及び中国人の間に信仰が維持されており、鄭成功に味方した中国人の中にも信徒がいたということである。又、初めフィリピンに、後福州において布教に従事したドミニコ派のビットリオ・リッチ (Vittorio Ricci) は、鄭成功と交わりがあったが、彼はオランダのキールン攻略後二十一年にして台湾を二度旅行したとき、多くの台湾人の中にキリスト教の信仰をもっているものが居り、彼等に洗礼を授けたということである。<sup>16)</sup>

## 六、オランダの台湾植民の終焉と宣教師

日本人が台湾に來なくなつてから三十年間、またスペイン人が駆逐されてから二十年間、オランダは台湾における貿易を独占した。しかるに、一六六一年オランダ自身も亦本島から退去を余儀なくされる日が到來した。オランダをゼーランシアに撃つたのは他ならぬ鄭成功であった。

鄭成功の台湾来襲の不安はオランダ側に濃厚であり、かねて彼らは沿海を警備していたのであるが、成功はその裏をかいて、一六六一年四月、オランダの艦隊がバタビアへ引揚げた虚をついて、たちまちオランダ人の本拠に殺到した。彼らは四月末日兵船数百に二万五千の精兵を乗せて、ゼーランジア城及プロビンシア城へ攻め寄せたのである。これから、両軍の間に折衝が行われたが、オランダ軍は降服せず最後の守戦を試みた。かくて五月四日プロビンシア城は陥り、更にゼーランジア城も五月二五日以来包囲され、その後九ヶ月にして、一六六二年二月一日城が明け渡された。この間の事情はオランダの最後の台湾長官コイエットの『閑却された台湾』に詳しいが、両軍の間の折衝の任に当たった宣教師ハムブルーク (Antonius Hambroek) の態度は、オランダに対する愛國の至情に殉じたものとして世界の人々に覚えられている。

この間鄭軍に捕えられたオランダ人の男子は尽く処断されるよう命ぜられ、これは実行された。その中校長フォルン (Voorn) は他のオランダ人の通訳とともに新港において捕えられ、七月サッカムで三日間木に吊られた後また新港に連れ戻され、そこで十字架に付けられ、手と足首に釘をうたれて三、四日の間民衆の前に曝らされて、一滴の水も与えられず、遂に死んだ。ただ最期にハムブルークにより祈りを捧げてもらうことだけは許された。また同年一〇月二一日のゼーランジア日記によれば、ハムブルーク自身とファボランの牧師ムス (Petrus Mus) 及びサッカム及新港の牧師ウインセム (Arnoldus a Winsen) 並びに校長オッセウエイヤー (Ossewayer) スウランの役人ボックス (Box) 等は首を刎ねられた。しかるに牧師レオナルデイス及び前プロビンシアの長官代理ファレンティーンとその妻並びに五人の子ら、その他多くのオランダ人の少年達は中国につれて行かれた。ハムブルークの娘は鄭成功の妾にされ、その他多数のオランダ人婦女子は中国人の奴隷にされた。

ゼーランジア城陥落後三年の一六六五年、オランダ海軍司令官ポルトはキーレン港口のサンサルヴァドル城を修理して、徐ろに恢復の基礎を固めようとしたが、その翌年鄭軍が兵を北部に進めるに及んで、オランダ人は孤立無援の

形勢におかれ、ここにおいて台湾への望みを全く絶って、遂に一六六八年五月退去を余儀なくされたのである。<sup>(20)</sup>

ここをもって、オランダの台湾における支配は消滅し、また、それとともにその布教も終りを告げた。一六二四年彼等がはじめて来島して以来多くの宣教師が当地に布教し、相当の成果を見たことは前述の如くであるが、それも四十年足らずで挫折したのである。当時台湾からインドのネガパタムに逃れて来た一オランダ宣教師クルイフ(Ioannes Kruff)の一六六二年一〇月一三日付セイロン島の同僚への書翰には次の如く記されている。

「このような思いもよらぬ幾多の家族・三十名近い牧師とその生命・財産の破滅、会社の損害及び不名誉並びに言語に絶する不幸を誰か涙なくして見ることができよう。これ皆われわれの種々なる罪惡に対する神の正しき怒りの結果と考えられる。」

その後二百年の間、台湾の布教は全く跡絶え十九世紀の半までこの地の布教史は空白となった。ただし、一七一五年デ・マイラ神父(De Maille)が台湾を訪れたときには、まだ少数のキリスト教徒が残っていたと報じている。中国人の中には皆無であったが、台湾人の幾許かものは尚お信仰をもっており、オランダ語をも解し、オランダ語を読み書きできたという。彼等は偶像を拜せず、異教の儀式をなさず、創造主と父、子、御霊の信仰と、アダム、エバの物語及び罪と洗礼についての知識をもっていたが、はたして洗礼を行っていたかどうか不明である。しかし彼らは子供が生れるとこれを水につけて潔める習慣をもっていた。そこでこの神父は彼らに洗礼の様式について教えたと述べ<sup>(21)</sup>ている。

## 七、むすび

それにしても、台湾におけるオランダ人のキリスト教伝道の影響が余りにも弱かったのは何故であろうか。これについては、宣教史の権威であるエール大学のラトゥーレット教授は、住民の文化の程度が極めて低かったこと、そ

れでオランダの支配力に従わざるを得なかったことを述べ、「われらの知るかぎりでは信徒はオランダの支配が終つた後長く存続しなかったが、その理由は、キリスト教があまりにもオランダの威力に頼り過ぎたからではなからうか。」といっている。<sup>(23)</sup> たしかに、若し政府の力から離れて、民間に強力な布教団体があるとか、又はカトリック教國のように、政府自体が強力に変らざる布教活動を推進せしめるならば、伝道の影響は強められるのであるが、布教が政府の力に頼りすぎ、しかも、その政府が布教に関して便宜主義又は功利主義的のものであれば、布教もまた政治力と運命を共にせざるを得ないのは自然のことであろう。オランダの台湾における場合は地域的にも局地に限られていたし、又、その期間も僅か四十年足らずでは、わが國のキリシタンの場合と比べることはできない。又、他の論者によればオランダの東インドの当局者達は、台湾で住民が改宗するのを奨励するのを差控えていた。つまりそれは彼らの貿易の相手である日本を余り刺戟しないためであった。日本ではキリスト教はひどく迫害されていたが故に。「こうして、しばしば他の場所でも見られるように、眞の宗教への関心が、マモンの祭壇の犠牲に供されたのである。救いの知識が金銭とすり替えられてしまったのだ。」といっている。<sup>(24)</sup> これはオランダの台湾伝道の場合の理解のために深い暗示を与えるものである。

- (1) 幸田成友『日歐通交史』、昭和一七、岩波、一七二頁。
- (2) シュターペル著、村上、原共訳『蘭領印度史』東亞研究所、三五—三六頁。板沢武雄『昔の南洋と日本』昭和一五、一—三頁。板沢武雄『日本とオランダ』至文堂、昭和三〇、第二章。
- (3) De Klerck, History of the Netherland East Indies, 1938, Rotterdam, Vol. II, pp. 503-504.
- (4) William Campbell, Formosa under the Dutch Described from Contemporary Records, London, 1903, p. 25.
- (5) Notices of Formosa, gleaned from the works of François Valentyn. Published at Amsterdam, 1726. (Chinese Repository, Vol. VI, Canton, 1838, pp. 583-584.)



- (6) 村上直次郎『ゼーランディア築城史話』(台湾文化三百年記念会編『台湾文化史説』台北、昭和五、五七頁)
  - (7) Campbell, Formosa under the Dutch, p. 35.
  - (8) 栗山俊一『安平城址と赤崁楼に就て』(『続台湾文化史説』台北、昭和六。)
  - (9) James I. Good, Famous Missionaries of the Reformed Church, 1903—Chap. IV. The Dutch Reformed Mission in Formosa, p. 38.
  - (10) William Campbell, An Account of Missionary Success in the Island of Formosa, London, 1889, Vol. I., p. 52.
  - (11) Ibid., pp. 81-83.
  - (12) Ibid., pp. 97, 99.
  - (13) Ibid., p. 38.
  - (14) Campbell, Formosa under the Dutch, pp. 93-97.
  - (15) 山中 樵『台湾三百年の史料』(『続台湾文化史説』四六頁)。
  - (16) Campbell, Formosa under the Dutch, pp. 497, 546.
  - (17) 伊能嘉矩『台湾文化誌』上巻九七頁。石原道博『国姓爺』吉川弘文堂、昭和三四、七六頁。
  - (18) Campbell, Formosa under the Dutch, pt. III. 『続台湾文化史説』四七一—五〇頁。
  - (19) Campbell, Formosa under the Dutch, p. 323.
  - (20) 伊能嘉矩『前掲』上巻、九九頁。
  - (21) Campbell, Formosa under the Dutch, p. 328.
  - (22) Ibid., pp. 510-511.
  - (23) Kenneth Scott Latourette, A History of the Expansion of Christianity, N. Y., 1939, Vol. III, p. 360.
  - (24) Chinese Repository, Vol. II, Canton, 1834, p. 410.
- その他の台湾布教関係図書
- 牧尾 哲『台湾基督教伝道史』台北、昭和七。
- 大國督編『台湾カトリック小史』台北、昭和一六。
- 井上伊之助『台湾山地伝道記』新教出版社、昭和三五。

Mizoguchi, Yasuo

## **The Colonial and Missionary Activities by the Dutch in Formosa**

### Résumé

Shortly before the construction of the Fort Zeelandia, in Formosa, the Dutch started missionary work around there in 1624. It lasted until 1662 when Koxinga sieged that fort. During those thirty-eight years the evangelization of the native people had progressed to a certain extent, that is, many thousands of the islanders were converted to Christianity, within the area of Dutch political influence. However the Christian faith did not seem to long survive the decay of Dutch rule.

We can refer, at least, to a few interpretations as to the reasons for the withering away of the Christian congregations in a comparatively short period. The first is Prof. K. S. Latourette's: "Presumably the Christianity which was so dependent upon Dutch prestige disappeared with the regime under whose aegis it had been initiated." (A Hist. of Expansion of Christianity, Vol. III, p. 360); the second is an article in the "Chinese Repository"; "the interests of true religion were sacrificed upon the altar of Mammon, and the knowledge of salvation withheld for money." (Jan. 1934); the third is Rev. J. I. Good's: "unfortunately, the work was often superficially done. The number of missionaries was too few, so that their work lacked depth and permanence." (Famous Missionaries of the Reformed Church, p. 48)

The writer will discuss briefly these historical circumstances of the seventeenth century in Formosa.